

もある。

圧迫感がエンジンに

博士課程を単位取得退学して事業に本腰を入れ始めた2009年ごろ。整頓された机の前に座っていてもアイデアが出ない。刺激を求めて外出したり、インターネットで遊んだりしたが、時間を空費しただけだった。たどりついた結論は、「机を散らかしておくほうがすぐ仕事に没頭できる」だった。

それに、この机、常に散らかっているわけではなく、潮の満ち引きのように整頓と混沌を繰り返すのだという。

年に100日以上出張する。出発前夜は午前零時に仕事を終え、徹夜で机を片づける。

「そのとき、情報が領域を超えてつながったり、無意識に考えていたことが表に出てきたり、ものすごくアイデアがわく」

だが、このカオス机、物をなくしたり、探す時間で時間を無駄にしたりしないのか。

「なくしてはいけない書類や機密資料はスキランして廃棄。紛れ込むと困るものは、机の上で目立つようにしています」

机の片づけが推奨される理由の一つに、視界に入る情報量を減らすことで、集中力が上がるという考えがある。だが、その逆で、業務を可視化することが仕事の推進力になるという見方

「資料を平置きに積んでおけば、仕事のプロセスやボリュームを『地層』で判断できます」

そう語るのはアニメ演出家の数井浩子さん(48)。封筒が平積みされた彼女の机は「地層堆積型」と呼ばせていたどころ。

数井さんはこれまで、「ケロロ軍曹」「ポケットモンスター」「らんま1/2」「忍たま乱太郎」など、200作品以上のキャラクターデザイン、作画、演出、脚本に携わってきた。

1話30分の制作には約300カットが必要だ。演出は一人ですべてのカットをチェックする。原画があがると目の前に積まれ、カットごとの原画が入っている封筒が平積みになる。仕事の進行状況が把握でき、ときにはその地層が心理的圧迫感を与え、仕事にエンジンがかかるのだという。

石井さんと同じで、もともと整理好きだ。以前は、常に「整理しなきゃ」という強迫観念があったという。

その考えを改めたのは4年前。東京大学大学院の研究で、広告会社の新商品のPR企画会議15時間分を分析した。録音データ



地層堆積型



アニメ演出家 数井浩子さん(48)
1965年生まれ。これまで200以上の作品にかかわり、演出や作画、キャラクターデザインなどを担当。仕事のかたわら、国際基督教大学、東京大学大学院で心理学を学ぶ

の中には、雑談も多かった。「統計調査では、はずれ値を取り除いてしまう。でも、すべてを分析するとおもしろい結果が出て、無駄だと思っていたものも許容できるようになった」

机の上の「ノイズ」も、新しい発想を生み出すタネになる。

「人間は、無意識のうちに目に入ったものから連想をしている。机の上に何かあれば、一見無関係のものを結びつける練習になります」

入ったものから連想をしている。机の上には何かあれば、一見無関係のものを結びつける練習になります

片づける時間も無駄

混沌が無意識を刺激する。前の石井さんとも共通する。

机の上に書類の山をいくつも築いているのは、元東京地検特捜部検事で弁護士の葉玉匡美さん(47)だ。常時、15〜20の案件の資料が積み上がっている。

葉玉さんのやり方はこうだ。まず自分の目の前30センチを作業スペースとして確保し、書類はその周囲、手の届く半径50セ

ンチ以内に積み重ねていく。ただし、高くなりすぎると崩れてしまう。そのときは、「上から3センチ分を取り、残りの資料は遠くに押し出します」押し出された資料は？

「机の上から落ちそうになっただけで捨てます。継続的に使わなくなった資料が後で必要になることは、ほとんどありません」

もちろん、裁判の証拠のような重要な資料は別に保管している。資料の山が押し出されていくこの方法は「ところてん型」とでもいうべきか。

「分類、整理するのは時間の無駄。手の届く範囲に必要な資料があるほうが仕事の速度も上がる。検察、弁護士時代を通して、他の誰より仕事は速い自信があります」

時間のロスが嫌だから片づけないのは、世の整理本と同じ理屈だ。かたづけ士の小松易さんも著書「仕事ができる人はなぜデスクがきれいなのか」の中で、1日10分の探し物は1年間で44時間もロスすると指摘している。葉玉さんはさらに「探す時間はもちろん、片づける時間さえもつたいない」と言う。

一橋大学大学院商学研究科の守島基博教授は、探す行為は時間以外のロスもあると指摘する。